

平成30年度
宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、掲示されている時間割のと通りの50分間です。
- 3 問題数は大きな問題が4問で、表紙を除いて10ページです。〔四〕は記述問題です。
- 4 解答用紙の答え方は、おもて面がマークシート方式でうら面が記述式です。
- 5 監督者の指示にしたがって、試験開始前に解答用紙冊子から解答用紙を切り離し、おもて面とうら面の受験番号を確認後、氏名を決められた欄に書きなさい。
- 6 答えは、それぞれの解答用紙に記載されている注意事項にしたがって、ていねいに記入しなさい。
- 7 試験中に質問があれば、手をあげて監督者に聞きなさい。
- 8 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおきなさい。

—
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

先進国は、異様に多くのエネルギーを消費しています。冷暖房や、自動車や、工場の操業などに、とてつもない資源を投入しています。そのおかげで、先進国の人々の生活は快適になり、ありあまる商品にこまれて暮らすことができるようになりました。

その一方で、開発途上国の人々は、まだそのような大量生産・大量消費の生活を享受していません。

しかし、開発途上国が先進国とおなじレベルの大量生産・大量消費をはじめれば、地球の資源と環境はすぐにパンクしてしまいます。中国一二億人の人々が、みんな自動車を一台もつようになれば、化石燃料はすぐになくなり、二酸化炭素の排出量とはとてもなく多くなりま

す。
南北問題を解決するために、開発途上国の経済と生活レベルを、いまの先進国のレベルにまで引き上げるとすれば、①ただちに地球環境はパンクしてしまいます。②人類は、共倒れになってしまいます。

だとすると、南北格差を解消する最後の道は、先進国のエネルギー消費や生活レベルを、いまの開発途上国レベルにまで下げることです。そうすれば、環境問題は一気に解決に向かい、南北格差もぐんと少なくなるでしょう。

②しかし、こんなことがほんとうに可能でしょうか。

冷暖房完備のいまの生活を捨てて、夏は暑く冬は寒い生活にもどれ

ますか？

一家に一台マイカーをもつのをやめて、自転車で通勤通学しますか？

スーパーに行ったらいつでも欲しいものが手に入るという生活をあきらめて、少ない商品を繰り返して使い、欲しいものがないときにはじつとがまんしますか？

海外からの商品や食料などの価格が相対的に高くなるので、いままでのように物を自由に買うことができなくなります。それでもいいですか？

.....
A しかし、それはたぶん無理でしょうね。

B 私たちの大多数が、それでもよいとほんとうに思うのなら、このやり方で成功するかもしれません。

C たとえば、消費税をほんの数%上げるといっだけの提案がされただけで、日本国中は大騒ぎです。

D 生活レベルを大きく下げてまでも、南北格差を解消しようと考える人たちが、日本人の大多数を構成しているとは思えません。

.....
庶民の生活を直撃する悪政だ、政治家たちは一般人の生活感覚をまったく知らない。そういうヒステリックな声で、メディアは埋まりま

す。
野党は、政府のそういうやり方を大きな声で非難します。

(a) そういうふうに非難しておかないと、次の選挙で地元

の支持を失い、落選するかもしれないからです。

もちろん、日本はこれから超高齢化社会に突入します。福祉のための税金が、どうしても必要になります。それには、国民はしぶしぶ納得するでしょう。

なぜかといえば、いつの日か自分自身が老人になって、福祉サービスを受けなくてはなくなるからです。そういう時の備えのためならば、いまの自分の生活を少々がまんすることはできます。

ふつうの人は、いまの給料を犠牲にして、生命保険なんかにはいつてもいますよね。

あれと同じです。

(b) 南北格差の是正は、これとまったく異なります。^③

日本人のほとんどは、日本で暮らして、日本で死んでゆきます。

日本人は、開発途上国の人間になって、そこで生活しなければなら
ないわけではありません。

自国の福祉の議論と、Iの議論とは、根本的に違います。

自国の福祉のためには自腹を切れるが、④開発途上国との格差是正のためには大きな犠牲をはらいたくない。こういうふうに考える人が、日本人のマジョリティであると私は推測しています。

国民の生活レベルをぐっと下げて、南北格差を是正するという対外政策をとるような政府は、国民からの支持を失って崩壊するでしょう。

国民の多くは、いまの生活水準をこれ以上下げたくないのです。いまの生活レベルを下げることなしに、地球環境問題に対応しようとしているのです。

(c) 日本の国民が納得する環境政策とは、いまの自分たちの生活水準を下げることなしに、地球環境問題や、南北問題を解決してゆくような政策だけなのです。

そんなII話が、ほんとうにあるのでしょうか。

ひとつの解決法は、あたらしいテクノロジーを開発して、環境問題を解決することです。(d) 二酸化炭素を大気中にばらまかなく

てもすむように、それを固めて個体化してしまう技術。あるいは、有害物質をほとんど出さないような工場のシステムの開発。あるいは、太陽エネルギーや核融合などの、代替エネルギーの開発。

これらの技術開発は、日本の生活レベルを落とさずに、環境問題を解決するための、ひとつの方法です。そして、そこで生まれた新技術を、開発途上国にどんどん売り込んでゆけばいいわけです。

実際、日本の政府や企業は、この新技術の開発による環境問題解決こそが、地球環境問題への最大の貢献だと考えているふしがあります。そして、そこに「全社をあげて」取り組んでいたりするわけです。

技術開発で環境問題を解決できれば、日本人の生活レベルを下げなくてもよい。

だから、ここに全力をかたむけるのだ。

こういう発想が、とくに企業の「環境問題対策」にはつよく出てい
るように思います。

(森岡正博「生命観を問いなおす」から)

(注) マジョリティ＝多数派、多数勢力

問一 ① 人類は、共倒れになってしまいました。とあるが、ここでいうその要因として適当でないものはどれか。

ア 化石燃料の減少

イ 大気汚染

ウ 有害廃棄物の処理問題

エ 少子高齢化

問二 ② しかし、こんなことがほんとうに可能でしょうか。とあるが、筆者がそう考える理由として適当なものはどれか。

ア 開発途上国で生活する人々と同じように先進国で生活の自由を制限すると、人々の間に競争が生じてしまうから

イ 先進国で暮らす人々と開発途上国で暮らす人々は、共存することとできないから

ウ 先進国で暮らす人々は、開発途上国の人と同じように暮らすことはできないから

エ 先進国の人々が開発途上国の人々と同じように生活すると、地球の資源が消費し尽くされてしまうから

問三 本文中の[A]から[D]の文を正しい順序に並びかえたものはどれか。

ア 「[C] ↓ [A] ↓ [B] ↓ [D] ↓」

イ 「[A] ↓ [D] ↓ [C] ↓ [B] ↓」
ウ 「[B] ↓ [A] ↓ [D] ↓ [C] ↓」
エ 「[B] ↓ [D] ↓ [C] ↓ [A] ↓」

問四 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア 「a なぜなら b しかし c すなわち d たとえば」
イ 「a すなわち b しかし c たとえば d なぜなら」
ウ 「a なぜなら b たとえば c すなわち d しかし」
エ 「a すなわち b たとえば c しかし d なぜなら」

問五 ③ これは、その内容として適当なものはどれか。

ア 日本人は、老後の福祉サービスを受けるためなら、今の生活をとにかく切り詰めて節約してもがまんできること

イ 超高齢化社会を迎えた今の日本では、以前より国民の税負担が増えていくこと

ウ 国民に納得される政治を行うために、野党が与党に対する非難を繰り広げていること

エ 消費税を数%上げただけで大騒ぎになるようなことは、開発途上国では考えられないこと

問六

I に入る言葉として、最も適当なものはどれか。

- A** 開発途上国の援助 **I** 先進国の国民
ウ 開発途上国の国民 **エ** 先進国の環境

問七

④ 開発途上国との格差是正とあるが、これに対する筆者の提案として適当なものはどれか。

- A** 有害物質や二酸化炭素を大気中に出さないために、新たな技術や代替エネルギーの開発を進めること
イ 開発途上国も二酸化炭素を少なからず出しているという事実を踏まえ、国を超えた実現可能な規制を早急につくること
ウ 先進国にくらべ、大気汚染などの環境問題が深刻である開発途上国の人々の意識を高めること
エ 環境問題をより深刻なものにしてしまわないよう、新たな技術開発を控えたり、国民一人一人が節約をしたりすること

問八

II にはある慣用句が入る。次のうちどれか。

- A** 耳の痛い **イ** 虫のよい
ウ 馬が合う **エ** 眉をひそめる

問九

本文で述べられている内容として適当なものはどれか。

- A** 一般人の生活感覚を知らない政治家たちは、庶民の生活レベルを超えて開発途上国に支援をしている。
イ 多くの日本人は、太陽エネルギーや核融合などの代替エネルギーの開発には否定的である。
ウ 日本における超高齢化社会を解消するためにも、より環境問題について理解を深めるべきだ。
エ 環境問題を引き起こしている原因として、先進国の冷暖房やガソリンなどの大量消費が挙げられる。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

最近、病気の母親を抱えて一人で生きていくことに疲れを感じていた「友子」は、職場で知り合った男性との結婚を決意した。そんな中、母親のかねてからの希望であった墓参りを「友子」が提案し、二人で京都に出かける。

睡眠不足が度重なり、いつも起こる、友子にとってはお馴染みになった偏頭痛を伴う目眩^{めまい}であった。足もとがふらついて、ふと、まるで助けを求めているみたいにすぐ隣を歩く母の腕に手が伸びたが、次の瞬間本能的に手を引っこめていた。雨は夜半まで降り続いた。^①宿の食事をとったあと、テレビを見ながら少し話をしたが、もう我慢できずに友子が先に床に入った。つられたように母も布団^{ふとん}に横たわったが、^②案の定うまく寝つけないようだった。いちばん小さな黄色い豆電球だけを残した薄暗い部屋の中で、母は幾度も幾度も寝返りを打っては溜め息をついた。まどろみながら母の寝返りを聞いていた友子は、今までにもう何度繰り返してきたか判^{わか}らないこれと同じような夜の数々のことを思い出していた。最初のあの目のように突然奇声をあげて倒れるようなことがないだけましともいえるのかも知れないが、母の不眠症は日を重ねるにつれてひどくなっていくばかりである。そのころ、母はちょうど今のように、寝返りと溜め

息を果てしなく繰り返していたものだ。寝れないの、という友子の問いに、母は「うん、大丈夫」と答えるばかりだった。

翌日の朝には雨はあがっていた。まだ去りかねているらしい雨雲が古い都の町の上空に張りつくように澱^{よど}んでいたが、湿度は不快というほどではない。宿を出て、車で念仏寺へ向かった。墓地の所在は母自身もおぼろげにしか憶^{おぼ}えていないらしく、とにかく念仏寺まで行ってくれば思い出せると思うと母が言うのでまずは向かつてみることにしたのである。だが念仏寺まで行ってみても母ははつきりしたことを思い出さないまま、「なんだかお腹空^{なかす}いちゃった」とだけ言った。仕方がないのですぐ近くにあった店で少し早い昼食にした。食事を終えて外に出ると、上空を覆っていた雨雲はさっきよりもずっと厚くなっていて、昼前というのにあたりはどんよりと薄暗くさえある。「降るかもねえ」空をふり仰いで言った友子のことばにつられて、母もふわりと上を向いた。^③その小さな顔は陶器のように白く、友子はなぜか目をそらす。店の駐車場を出て、友子は母のいうまま車を走らせた。嵯峨野^{さかがの}の細い道は車で通るには頼りないような感じがして、ゆっくりゆっくり進まざるを得ない。「このまま真っ直ぐでいいの？」後部座席を振り返って訊くと、母はぼんやりと小さく頷^{うなず}く。道の両脇に並んでいた土産物屋や茶屋が、だんだん少なくなってくる。他に術^{すべ}もなくそのまま道を進んだが、傾斜はさらに急になり、道は完全に峠道の様相を呈^ししてきた。不安になってバックミラーの中に母を覗^{のぞ}き見ると、母は目をつぶっている。ふと横を見た友子は思わず「あら」と声を出した。混濁した白っぽい緑色に

流れる川の上空に、橋が架けられていた。そうして、川の対岸には玩具のように見える駅舎があるのだった。向こう岸、駅の裏手もこんな山で、人家らしきものは見あたらない。あの駅を、誰が利用するのだろう。「見て、お母さん。こんなところに駅がある」少し明るくなった声で言い、後ろを見ると母は額を車の窓に押しつけるようにして川のむこうの駅を見ていた。「ねえ、誰のための駅なんだろうね」「……ほんとね」母の声はひどくかすれていた。「どうしたの……」言いながら振り返ると、母は窓の外からの光を顔に白く映しながら眉間に深くシワを寄せている。「お母さん……？」その言葉が終わらないうちに、母は切り捨てるような口調で言った。「戻って、友子」「え？」「この道、戻ってちょうだい」友子はしばらく（ a ）した表情で母の顔を見つめた。母の言っていることばの意味が、頭の中でうまくつながらなかった。「どういうこと……？あ、道を間違えてたの？」「嘘なの」「え？」「嘘なのよ。今まで言ってきたこと、全部嘘なの」「……？」「ご先祖さまのお墓なんてないのよ」雨雲が急に一段低くなり、あたりが一層暗くなった。⑦ずっと下のほうに流れている川の水音を、すぐ近くに聞いたように友子は感じた。「駆け落ちしたなんてのも嘘。それにお母さん、親なんていないの。顔も知らないの。だから、ご先祖さまのお墓なんてあるわけないでしょう……」「……どおしてエ？」自分でも驚いたほど、ふぬけたような声が出た。母は情けないような顔になって小さく首を振る。「わかんない……。言ってみたかっただと思う」誰のためにあるのか判らない駅は、薄曇りの川の岸辺にさっきと同じ佇まい

を見せている。何をしてでも生きてゆける。——まだ母が元気だったころ、よく言っていたことばを不意に友子は思い出した。何年のあいだ、あの駅はあんなにひっそりとあそこに佇んでいたのだろうと、ふと思う。「ごめんね……」急な勾配を下りはじめると、母は（ b ）そう言った。二尊院でよろけそうになったとき、母の腕に伸びかけて引いた自分の手のことを友子は思い出した。自分自身がもうかなり長いこと、目眩を感じても寄りかかる腕のない日々を過ごしてきた、と思った。

東京に帰り着いたのは真夜中に近かった。マンションの駐車場に車を入れてしまうと、友子は後部座席で丸くなって寝こんでいる母を起こした。「着いたよ」言うとき母は（ c ）身体を起こした。

「もう……？」何度かまばたきをして、母はまだぼんやりとした感じで言った。友子の肩の上には、腕がもげ落ちてしまいいそうな重い疲れがある。「やめようか」前を向いて運転席に坐ったままで、友子は（ d ）言った。身体を起こしたせいでシートの上に正座する姿勢になっている母は、視線をあげて友子のほうを見る。⑧「やめようか、結婚するの」下唇を噛んでいた母の表情がだんだんに崩れ、声にならない音を友子は背中で聞いた。橋のむこうに小さな駅がある風景が、友子の胸の中でゆらゆらと揺れる。伸びかけて引かれた手や、数々の心地悪い夜や、今の疲れや、さまざまなことが頭の中をめぐった。それでも自分は背後に母の体温を感じることはできる。雨雲は東に動いて、今夜はこちらにも雨が降りそうな気配である。

（驚沢蒔「岸辺の駅」から）

問一 ① 次の瞬間……引っこめていた。とあるが、「友子」がそのよ

うな行動をとった理由として最も適当なものはどれか。

ア 今の生活に疲れを感じていて、母親から距離を置きたいとい
う潜在意識が働いたから

イ これまでずっと母親だけを頼ってきたが、病気を抱えている
今、母親に甘えてはならないと判断したから

ウ 自分の目眩の原因は睡眠不足による疲労であると判断し、同
じ症状に苦しむ母親に頼るわけにはいかないと思ったから

エ 自分をずっと苦しめてきた母親への憎悪^{ぞうお}を思い出し、我に返
ったから

問二 ② ④ 案の定、様相を呈しての本文中での意味の組み合わせとして
適当なものはどれか。

ア 「② いつものように」 ④ 行く手を阻^{はば}んで」

イ 「② 予期したとおり」 ④ 状態を表して」

ウ 「② 普段にもまして」 ④ 気配を感じさせて」

エ 「② どのようにしても」 ④ 条件を満たして」

問三 ③ その小さな顔は……目をそらす。とあるが、その理由とし
て考えられるものはどれか。

ア 母親のせいで目的地に行くことが遅れそうなのに、平然とし
ている母親の態度にいら立ちを感じたから

イ 母親の顔色が悪いのは、自分が無理やり墓参りに連れ出した

からだと反省したから

ウ 母親の冷淡な表情に、結婚前に少しでも母親を思いやろうと
していた気持ちが薄れたから

エ 弱々しく見える母親の様子を見ると、母親から離れよう
としている自分にうしろめたさを感じたから

問四 ⑤ 少し明るくなった声で言い、とあるが、その時の「友子」の
様子として最も適当なものはどれか。

ア いい加減な道案内をした母親を責め立てようとしていたが、
自然に囲まれた駅舎の風景によって気分が和らいでいる。

イ 人家も見当たらない状況の中で心細さを募らせていたが、人々
が行き交う駅舎を目にして安心している。

ウ 頼りなく険しい道をこのまま進むことに疑問を感じていたが、
思いがけず目の前に開けた風景にほっとしている。

エ 天気が悪くなるにつれて気分も沈んできていたが、雄大な自
然を見たことによって気分が晴れ晴れしている。

問五 ⑥ 母は切り捨てるような口調で言った。とあるが、この時の「母」
の様子として適当なものはどれか。

ア これからも親子で暮らしていきたいという願いを汲^くみ取らな
い「友子」にいら立つ様子

イ 今までずっと隠してきた真実を「友子」に告白する覚悟を決
めた様子

ウ 自分が嘘をついたことに対して「友子」に文句を言う隙を与えまいとする様子

エ 事実を知った「友子」がどのような反応を示すかさぐりを入れようとする様子

問六 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

- ア 「a」もっそりと b ゆっくりと c ぽかんと d ぼつりと」
イ 「a」ゆっくりと b もっそりと c ぽかんと d ぼつりと」
ウ 「a」ぽかんと b ぼつりと c もっそりと d ゆっくりと」
エ 「a」ぼつりと b ぽかんと c もっそりと d ゆっくりと」

問七 ⑦ ずつと下のほうに………感じた。とあるが、この描写が意図するものとして最も適当なものはどれか。

- ア 「友子」の心理的な衝撃の大きさを強調している。
イ 揺れ動く「友子」の心情を、川の流れに重ね合わせている。
ウ 「友子」の怒りの激しさを描いている。
エ 感覚を研ぎ澄ませる「友子」の様子を、効果的に描いている。

問八 ⑧ 「やめようか、結婚するの」とあるが、「友子」がそのように言った理由として適当でないものはどれか。

ア ひっそり佇む駅舎の姿に母親と自分の人生の共通点を見出し、母親とのつながりを感じたから

イ 長い年月にわたって風雪に耐え抜いた駅舎の様子に母親の人生を垣間見て、見捨てるわけにはいかなかったから

ウ 誰にも顧みられることなく佇む駅舎の存在が母親の寂しさを暗示しているように思え、申し訳なさを感じたから

エ ずつと変わらずに存在してきたであろう駅舎の姿が母親の姿と重なり、母親が大切な存在であることに気づいたから

問九 本文における表現の特徴についての説明として適当なものはどれか。

- ア 雨雲の様子を描くことによって、「友子」の心のありようの変化を効果的に読者に印象づけている。
イ 母親と「友子」の行動に関する描写を極端に少なくし、心理描写を多く用いることで二人の心理的な葛藤を際立たせている。
ウ 感覚的な表現を多く用いることで、神経が過敏になっていく「友子」の様子を中心に描こうとしている。
エ 母親と「友子」の短い会話を繰り返し描くことで、二人の気持ちがいかに最後まですみやかに合合わない様子を際立たせている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

① 寝たりける程に、烏帽子を鼠の食ひて持て行きて、食ひ損じたりければ、取り替への烏帽子も無くて、袖をかつぎて、籠り居たりければ、主大納言これを聞き給ひて、^(注1)「いとほしき事かな」とて、我が烏帽子を、「これ取らせよ」とて給はせたりければ、内藤、その烏帽子を給はりて、^(注2)異待共に向ひて、「主達よ。これ見よ。寺冠社の得てせむやは。一の大納言の御旧烏帽子^(注3)は、給はりてせめ」とて、頸を持ち立て、したり顔に袖を打ち合わせて居たりけるを見て、人皆笑ひけり。世にははかなき事に付けて、かく物をかしくいふ者のあるなりけり。^(注4)

(注1) 烏帽子えぼし 元服した男子のつけた冠の一種
(注2) 寺冠てらかん 寺社に仕える身分の低い者たちがかぶる冠
(注3) 御旧ごきゅう 昔の
(注4) 「今昔物語集」から

問一 ^(a)いとほしき事、^(b)はかなき事の本文中での意味はそれぞれどれか。

(1) ^(a)いとほしき事

ア ありえないこと イ なさけないこと

ウ かわいそうなこと エ もったいないこと

(2) ^(b)はかなき事

ア おそれ多いこと イ 張り合う気にもならないこと

ウ 本人とは関係ないこと エ ちよつとしたこと

問二 ^①寝たりけるの主語として適当なものはどれか。

ア 語り手 イ 大納言 ウ 内藤 エ 異待

問三 ^②寺冠社の得てせむやは。の解釈として適当なものを選び。

ア 冠は身分に合わせたふさわしいものを選ぶべきだ。
イ 身分の低い者がかぶる冠など身につけるものではない。
ウ 神聖な寺社の冠など自分が身につけることはできない。
エ 本当は神の力を宿した寺社の冠を手に入れたかった。

問四 ^③めは已然形の助動詞である。^(注1)に入る係助詞として適当なものを選び。

ア や イ ぞ ウ なむ エ こそ

問五 ^④人皆笑ひけり。とあるが、その理由として最も適当なものはどれか。

ア 烏帽子を失い袖で顔を隠して部屋に籠っていた「内藤」が、「大納言」の烏帽子を得て得意げに気取っているから

イ 烏帽子を鼠に食われて泣いていた「内藤」が、「大納言」の烏帽子を得たあとは人を見くだしはじめたから

ウ 作戦通りまんまと「大納言」の烏帽子を手に入れた「内藤」が、両腕を組んで大げさに自慢しはじめたから

エ 「大納言」の烏帽子を得た「内藤」が、いやいやながらも皆の前でそれをかぶっておどけてみせたから

次の文章と【資料】1・2を読んで、後の問いに答えよ。

(a) 四門遊觀とは、釈迦しゃかがまだ太子であつたとき、王城の四方の門から郊外に出かけ、の苦を見て人生の無常を感じ、出家を決心したという話から生まれた四字熟語である。釈迦は東門を出て老人を、南門を出て病人を、西門を出て死人を見た後、北門を出て修行者に会い、出家を決意したといわれる。

(「漢検 四字熟語辞典」から)

釈迦「^②どうして、そのように優雅で、尊い人柄ができたのか。」

「自分もかつて老・病・死という、人生の大きな問題で苦しみ続けたが、他の人に相談しても、瞑想めいそうしても、それが解消されることがなかった。だから、自分を正しく支配できるように、厳しい努力で修行を続けているのだ。」

1 ぶらぶらする。きままに歩きまわる。

- 2 好きなことをして楽しむ。
3 遠出をする。旅をする。見物してまわる。
4 あちこちをめぐる。説く。説きまわる。

問一 (a) 郊外、遠出、説、の読みをひらがなで書きなさい。

問二

に入る語を、【資料1】から抜き出して答えなさい。

問三 ① 出家を決意したとあるが、その理由を説明した次の文の空欄に入る語句を【資料1】から抜き出しなさい。

人生の苦しみにふりまわされることなく、
「」するため。

問四 ② どうしてが直接掛かっている文節を抜き出しなさい。

問五 【資料2】はある漢字の意味を並べたものである。その漢字一字を、資料以外の本文から抜き出しなさい。

